●本誌は日本に於ける婦人運動の先驅也

世界婦人

●政治上に於ける婦人の自由

何れの時、何れの國を問はず、社會國家が獨り男子のみにて成立ちたること無きは論ずる迄も無かるべし、さればとて、元來男子は社會國家を組織する主なる分子にして女子は唯だ之が從たるものとなす如き、不條理、沒常識なる議論を御尤なりと感服する者も恐らくは今の世にわらざるべし、然るに今日の日本婦人の政治上に於ける地位は如何ぞや。

吾等は、今ま俄かに、婦人をして、代議士たるの權利、代議士を選擧するの權利を、得せしめよと叫ぶ者に非ず、然れども今日の法律が婦人に對するや、其の政治上に於ける一點の自由をも認めざる也、換言すれば、日本婦人は政治上に於て全然獨立の人格を有せざる也、事實は明かに治安警察法規定の上にあり、讀者宜しく之に依て自己の境遇を省られよ。

左に揭ぐる者は政治上の結社に加入することを得ず
一、現役及び召集中の豫備後備の陸海軍人
二、警察官
三、神官神職僧侶諸宗教師
四、官公立私立學校の教員學生々徒
五、女子
七、未成年者
七、公權剝奪及停止中の者
女子及未成年者は公衆を會同する政談集會に會同し若くは發起人たる事を得ず

此の規定によれば、婦人は全く未成年者の如き無能力者と同一視せらるゝ也、甚しい哉、婦人の侮辱を蒙るや。

然れども、吾等婦人にして、若し事實に於て、無能力者と異る無しとせんか、吾等いかで此の侮辱を拒むべけんや、然れども、吾等は、日本の國家政府の爲す所、之と相矛盾し相反對するの事實甚だ多きを見る、日露戰爭開始せらるゝや、吾等婦人の眼に最も著しく映じたるものは、彼の愛國婦人會なるもの、活動なりき、而して之を組織せる幾萬の會員は、その總裁を始めとして皆な悉く日本法律が無能力者を以て遇するの婦人なりし也而も又た、政府當局者を始め社會一般は之が効績を稱讃して措かざる也。

『女子判任官の任命』といふ近來新奇なる事實は新聞紙上に屢々報導する所にして、世は之に向つて注意の眼を開きたり、蓋し、日本の法律が全然無能力者として認定したる女子は、同じ日本の法律に依つて國家の公務に從事するの重職に任ぜられたれば也。

然れども『愛國婦人會の効績』や、『女子判任官の任命』や、抑も何を以てか女子の名譽なりと稱するや、思へ婦人諸君、自由無きもの、効績は奴隷の効績なり、所謂『効績』の文字、豈に吾等婦人を愚弄し盡して餘あるものに非ずや、更に自由無きもの、任官に至りては、之れ實に奴隷の二重服從なり、豈に恥辱の極と言ふ可からずや。

是れ唯だ最近に目擊せる實例のみ、吾等は日本國家が婦人を待遇するの道に於ては、餘りに多くの矛盾あるを擧げる也、然れども吾等は、單に此目前の事實にのみ執着して淺薄なる憤慨の辭を漏す者に非ず、即ち學者の研究は吾等に與ふるに殆んど滿足すべき一事實を以てする也。

モルガンと云へる人は、北米に於る土人の古き生活狀態を頗る精細に研究したり、其研究の結果によれば、其土人は多く大なる社會を成し、首長あり、議會あるを常とし、首長も議員も、共に成年男女が普通に同等の投票權を以て選擧したるものなりと云ふ。

然るに時代漸く進み、私有財產制度起り、專制君主現はれ、母系組織の社會は變じて父系組織の社會となり、而して何時の間にか女子は男子の壓服する所となりて社會國家の公共事務より殆んど全く隔離するに至りしなり、果して然らば、今日に行はるゝ法律習慣は、甚だしく婦人の自然を破却せるものと言はざる可らず。

今、吾等の要求せよと唱ふるは、古代の所謂野蠻人が有せし如き進步せる高尙なる（婦人の境遇は野蠻時代に却つて進步せり）權利を指すに非ず、百尺竿頭一步を讓りて、尤も卑き、尤も狹小なる自由を言へるのみ、即ち治安警察法が吾等に對して禁止したる、政治的集會と結社の自由を要求せよと言ふにあり。

以上、餘りに理窟に走りたり、吾等は深く之を慚愧する者なり、然れども、吾等素より男子と相愛し、相助くる時に於て、眞の生命と希望とを發見す、さればこそ男子と共に家庭を作り、社會を成し、國家をも建つるなり、永き惡習慣に慣れたる男子は、今ま、吾等の要求を見て其の甚だ沒趣味沒人情なるを憎むならん、然れども是れ家を愛し、社會を愛する所以なるを如何せん、寧ろ男子を愛する衷情の禁せざるを如何せん、花の色香を戀ればこそ、胡蝶は舞ひもし狂ひもすなり。

スタエル夫人

●本誌を讀まざるものは眞の婦人に非ず

マダム・ド・スタエル略傳

アンヌ・ルイ・ヂエルメーヌ・ド・スタエルは一七六六年四月二十二日、巴里に於て生る、彼女の父は即ちルイ十六世の下に有名なる大藏大臣ヂアツク・ネツケルであつた、彼女は非常なる早熟の兒であつて、十一歲の時は既に客と應接し、衆人稱讃の中に生長した。

二十歲の時、マリー・アントアネツトの媒介に依りて、當時佛國朝廷にありし瑞國公使スタエル・ホルスタインと結婚した、されど此の結婚は彼女の爲めに幸福を來らせず、多くは別居の生涯を送り、遂には相離別するに至つたのである。

マダム・ド・スタエルの氣質と地位とは、當時佛國に熱沸せる大騷動に對して無關係で居ることが出來なかつた、彼女が自由を愛するの熱情は、彼女をして其の全勢力を擧げて是に投ぜしめた、彼女の俱樂部は實に英國憲法稱讃者の集會所であつた、一七九二年、巴里に於ける革命運動起りて、騷動と暗殺とが漸く猖獗を極むるに至り、彼女は父と共にセチヴア湖畔のコツペツトに隱れて家を選び、後ち轉じて英國に渡つた。

三年の後、彼女は再び巴里に歸り、從前の俱樂部を再興せんと欲した、然るに同年既に內閣の疑ふ所となりて再びコツペツトに歸り、更に一七九七年に至つて又た巴里に歸り而して其の俱樂部は新たなる光彩と勢力とを添へたのである。

此處に訪ひ來る人々の中マダム・ルカミエル、マダム・ド・ボーモン、シー・ヂヨルダン、フーリエル、及びバンヂアマン・コンスタン等は其の首なるもので、殊にバンヂアマンは彼女の情人となりし人にして、此人も亦た痛く彼女を苦しめたのである。

彼女の俱樂部はナポレオンに對しては實に强敵であつた、故にナポレオンは一八〇三年十月に彼女を巴里より放逐したのである、是よりして彼女は、獨乙及び伊太利を旅行し、一八〇五年に三たびコツペツトに留つた、而して此處には又た舊知新友の多くが集ひ來りて、智識ある人々の俱樂部を設立した、一八〇七年、彼女は又た日耳曼に旅行したが、其の歸るに當りてや宗教的覺醒の音信を齎らして來た。

彼女の公にしたる獨乙語の著書は、ナポレオンの嚴令に反對する合圖であつた、而して其の佛語譯は禁止毀棄せられ、彼女はコツペツトに引戾されて、一種の高等囚人として看守の下に置かれ、加ふるに、友人の來訪に接することを禁じられた、一八一二年、彼女は遂に脫走した、而して露ペテルスブルグ、スウエーデン、及び英國等に於て能く匿れ了せたのである。ナポレオンの敗北するや、一八一五年、彼女は巴里に歸るを得た、然れども、彼女は其の回復せられし政府が、君主政的傾向を有せしに頗る不滿の感を懷いたのである。

彼女は其の政府より二百萬法を受けた、蓋し彼女の父が曾て國庫に置き去りしものである、かくて彼女は最とも幸福に、一八一七年の七月即ち其の死に至るまで、此の首都に留まつて居た、其間、一八一一年、當時二十三歲の士官たりしアルベル・ド・ロツカと私かに結婚して一兒の小兒を設けた。

彼女の著書は此革命時代に於て殊に重要なるものであつた當時ローマンチシズムの準備中なりし佛國文學に對して大なる刺激を與へたのである、彼女の著書は甚だ多い、而して其內最も著しきは、"Corinne, Delphine, Germany, Ten years of Exile, Consideration on the French Revolution"等である。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

婦人小觀

幸德秋水

△福田女史足下、僕はお轉婆を尊ぶ、おきやんを尊ぶ、刎ッ返り、飛上り、ガラガラの婦人を尊ぶ、露國今日の革命の大運動は、三十年前ザンギリ頭で眼鏡をかけ、無地の粗服を纏ひ、書物を手にして濶歩せる虚無黨の少女諸君に依て開始せられたる者也

△予は嘘つかぬ婦人を尊ぶ、予の知れる限りに於ては天下に嘘つかぬ婦人極めて稀れなり、『私は貴郎に惚れました』と明言し得る婦人幾何ありや『私は貴郎を嫌いで御坐います』と明言し得る婦人幾何ありや、但し天下に嘘つかぬ男子も亦極めて少なるは、女性諸君の反駁を待たずして僕之を知る

△福田女史足下、僕は今のお寺參りするお婆さんを好まず、お寺參りする少女は更に好まず、宗教に依りて信用を得んとするは僞善也、宗教に依りて救はれんとするは利己也、自ら宗教の爲めに犧牲たるを甘んずること、初期基督教婦人の殉道の如きに至つて、始めて尊ぶ可し

△僕は親兄弟を振棄て丶殿御に附く婦人を尊ぶ、同時に亦た能く亭主の壓制束縛不法に反抗し得る婦人を尊ぶ

△僕は戀を好む、結婚を好まず、佛國の諺に『永く戀せよ、決して婚せざれ』と言へるは、能く世相に達せるの言也、婦人現時の結婚は婦人の自由の束縛也、婦人の首枷・手枷也、現時の家族制度は直ちに婦人奴隷制度也、天下自由を尊重するの婦人は、假令七人の情郎を有するも一人の亭主を戴かざるを要す

△福田女史足下、僕に歌あり

鮮血赤き斷頭臺は恥辱ならずと、書きて死たる昔少女よ
親何ぞ同胞何ぞ富も名も、捨て丶狂ひし人の戀あはれ

春風や姉さんかぶり右手に鎌、脊の草籠にとまる蝶々

乞ふ、叱正を賜はらんことを

婦人の請願運動

吾等婦人の政治上に於ける自由を獲得せんが爲めに、婦人自ら其の運動を開始せしことは、前號に報導せり、彼等は今日議會に向て左の如き請願書を提出せんとして引き續き運動中なり、曩きに請願用紙を受取れし諸姉は至急調印の上、本社まで送附せられんことを、又た未だ請願用紙を受領せざる諸姉は郵券二錢[illegible]添へ至急申込あらんことを。

請願書案

治安警察法第五條は女子が政談集會に出席し及政社に加入するを禁止せり、是れ女子を以て未成年者若しくは無能力者と同一視するものにして不道理の甚だしきものなり

今や女子教育は大に進歩し、女子の職業に就く者は著しく増加し、女子が政治上に趣味利害を有すること亦た昔日の比に非ず、現に選擧等の事に就き女子が活潑なる政治上の運動を爲す者も少からず、又日露戰爭の際の如き女子の團體が、軍國の爲に多大の盡瘁を爲せるは世人の記憶に新なる所なり、然るに法律が猶は女子に對して如上の禁止を存せるは我等の默視すること能はざる所なり

我等は衆議院が一日も早く此法律の改正の爲に審議を盡されんことを希望し謹んで茲に請願す

降る雪よ、やみがたなくば積れかし
毀れは蹈み立て、蹴立て行かなむ

田中正造

海內時事

○岩崎家の新年献立

本月二日の新紙は麗々しくと、富豪岩崎家の新年献立を紹介致し候。彌之助氏の嗣子小彌太氏が此度修築したる駿河臺の邸に於て年頭の禮を受くるにより、精養軒に命じたりてふ献立をば試に御披露致し候はんに、洋名は煩はしければ省きて、

第一は巴里風の伊勢蝦、第二はメヌル形の鴨、第三は七面鳥雁肝詰、第四は牛の繊肉蒸燒、第五洋風豚燒物、第六は牛舌燉煮、第七は一種か牛一種か胡瓜一種か木茶、曰く何、曰く何、曰く何

もう書くのがいやになり候間止め候。最後に食卓上の飾菓子は幅一尺高さ一尺五寸の由。虚榮に眼のなき今の女子諸君の多くは、まあと羨やましさの眼を見張られ候はんも、われらはふゝんと鼻であしらふべく候。世の中を面白可笑しく暮したきは人間の情、贅澤したき人はなさるべく候へ共、虚榮の權化とも言はるゝ婦人の中より眞に自覺して虚榮の桎梏より脱却せられ候人の何時かは世に出で丶かれら醉ひされたる人々の頭上に大鐵鎚を喰はして、醜の皷を粉と碎かん時、徒なる悔を殘さんこそあはれにも存せられ候へ。嗚呼、彼等貴人のあさましくも美味と誇り候は、まことわれらが血にて、肉にて、汗にて候也。

○新年の女囚

同じ日の同じ新聞のしかも、新年献立の次にこの見出しを見付け候記者は實に今の新聞記者なるもの丶不埒なるに驚き入候、『忌はしき話なれどこれも人の子のことなり』胃頭先づぐつと記者の肝癪にさはり候。

目下市ヶ谷なる東京監獄に在る女囚人は總數四十七人詐欺四、竊盜十二、賭博六、放火六、拘留十六、殺三、未決囚には情夫と共謀して本夫を絞殺したる鈴弁やす(三十)といふがあり。容貌端麗なるに如何にして恐ろしき罪を犯したるかと同新聞記者は驚かれ候、ある怪しき㡡燈の下に論ぜられ候人々には通常の筆法に候も『此女初めは一昨年十二月十日生れの小兒を伴ひて入監せしも滿一ヶ年限の保育規定に基き引き取手なき貧小兒は區役所の手を經て養育院に送られしが母子處を異にしての翌年は流石のやす女も母子戀や暗涙に咽び居るなるべし』と冷笑的同情を寄せ候は御互に心憎う候はずや。

美人に毒婦淫婦多しとは申し傳へ候へ共天眞爛熳の少時には美しき人程心清くして醜き人程心ひがみ候由、容貌は其心を寫すとも申候へば實にもと存ぜられ候、只年長じての反比例は實に若々しき極みに候が、これ決して其人の罪に非ず。親の罪、社會の罪、殊には淺墓なる母の罪、朋輩の罪、否、更に之を翻弄する腰拔男子の罪に御座候。寄語す滿天下の婦人諸君！斯の如き事實を以て他人の事となさず、大に自らの弱點を覺悟すると共に先づ立つて浮世に蠢々たる腰拔男の子を盡滅せよ。

○日刊平民新聞出づ

日露戰爭の間群豪の中に卓然として花々しき難戰苦闘に斃れ候週刊平民新聞は今や劍を磨し裝を更め往年の猛士に加ふるに多くの新進氣鋭の士を以てして、暴戻なる紳士閥と戰ふべく、正に本日を以て其初號を發行致し候。今の世の新聞紙の悉く貴族富豪の味方にて何等の主義なく節操なきに反し、此平民新聞が獨り社會主義を標榜してわれら平民の味方たり殊に男子壓制の下に呻吟せるわれら婦人の味方たるは吾等の誠に心強く感ずる處に候。わが「世界婦人」は茲に慶んで「平民新聞」と、常盤に「兄妹の契」をなさん事を誓ひ候。

○直訴事件

曩日車駕を目懸けて直訴を企て候者の有之候事は未だ諸姉の耳目に新なる事と存候。當局者は神經衰弱症として、此憐れむ可き壯者を放免致し候由、思へば我國人民の幾何か能く神經衰弱たらざるべき、何の日か國國の神經衰弱者が蹶起して、直訴を企てん時、當局者の顏色果して如何にか候べき。

梅花と乙女

春々子

清さは梅花のすがたにて
薫りぞ梅花のこゝろかな。
篤さは乙女のなさけにて
戀愛ぞ乙女のいのちなる。
花はあらしに縦し散るも
薫りは永劫にとゞむなり。
戀はうつゝに消ゆるとも
節操はいかで破ぶるべき。

田中翁消息

生は二十三日已來さの田沼より館林及び渡良瀬川沿岸巡廻中、谷中村は五六日間逗留せり、此留守も亦如何あるか○夏作準備浸水除は目下着手、加藤氏盡力中には有之候。

谷中は明年夏作收入を期して村民自費にて浸水除普請の準備中○縣廳には復舊急水留二樣の請願中、而て土木吏は人民に麥蒔妨害魚業妨害中、來月十日控訴院公判あり、財政は欠乏いろ〳〵です

(十二月二十七日)

谷中のありさまは實に何とも〳〵複雜なる組織上の悲慘にてたとふるにものなし、波濤に岩礁にうたれて沈沒せる難破船なるべきか、決して予等の筆によく盡せず、此光景をして文學的人々社會的人々の耳目に觸れしめば、材料の豐富にして利益の多大なる、即ち無肥料にして籾十俵麥四石を得るものなり、しかるに此谷中問題を疏略にする文學及社會者は、寶の山も海も知らざるなり(卅日)

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

生涯の饑饉

上司小劍

女房の惡いのは一生の不作だと云ふことだが、亭主の惡いのは生涯の饑饉だ、結婚も一種の職業で、男子の情欲と云ふものにつけ込んで、こつちからは貞操と云ふものを米代にする以上、なるたけ良い賣れ口を見つけて、貞操――即ち肉體の獨占權を高價に賣り付けなければ損だ。

第一、貧乏な男を亭主にすべからず、これ何よりの條件なり、金が敵の世の中は即ち金が味方の世の中なれば、清貧とか云ふものに安んずるやうな亭主は駄目なり。金があつて、女房本位で、金の指輪や羽ショールを買つてくれて、一ケ月に少くとも一度は芝居へも連れて行つて呉るやうな男を亭主に持つが、女一生の豊作なり。亭主が外へ出て如何に見ぐるしく立ち廻はりて、女房の虛榮心を滿足させる資料を作りつゝあるかの如きは、今時の女の考ふべき問題にあらず。女子は虛榮の化身なり。己れの虛榮の爲めには亭主の榮辱など何うでもよし。

第二、名譽心の強き男を亭主にすべからず。これも女に取りては最も肝要なる結婚條件なり、金を欲しがる男、金の爲めなら何でもする男は、亭主に持ちて萬々損はなけれど、名譽心の強き男、名譽の爲めなら何でもする男は、女房に取りて頗る危險なり。いろ〳〵と理屈は云へど總べての人間は物質上の慾望――即ち金錢を得る爲めと、精神上の慾望――即ち名譽を得る爲めとの、孰れか一つを狙ふて蠢動しつゝあるものなり。此の外別に金も要らず、名も要らず、命も要らずと云ふ大豪傑無きにはあらざれど、これは今の世に極めて尠き上、こんな大馬鹿者を亭主に持つことは、女に取りて何よりの禁物なり。

物質上の慾望――即ち金錢を得る爲めに血眼になる男を亭主に持つ時は、貧逆間違つて亭主が牢へ入ることあるも、金だにあらば女房は喰うに困らぬなり。されど、精神上の慾望――即ち名譽を得る爲めに騷ぐ男を亭主に持つ時は、始終素寒貧に苦まざるべからざる上、何うかすると、喰うものすら無くなる恐れあり。亭主の名譽心に對する女房の犧牲。これ頗る重大なる問題なり。貧に苦み、世と戰ふ、男子にあつては快心のことならんも、連添ふ女房に取りては迷惑の次第なり。骨を削り、血を絞りて得たる名譽は亭主獨り之れを擅ひ、女房は貧苦の瘦せ損に終る『良人の名譽は妻の名譽、郎君の爲めなら三途の川へもお供する』と云ふが如きお人好しの女房は、婦人自意識の發達と共に無くなるなり。

男子金も要らず、名も要らず、命も要らぬ大馬鹿者となりて、世の爲め、人の爲めに働かんとすれば先づ眼前の妻や子を飢餓に泣かしめざるべからざるに至る。『志士苦心多』とは此の事ならんか。獨身なるかな。獨身なるかな。

今時の悧好な女は、物質上の慾望と精神上の慾望とを天秤にかけて兩方とも程よく懷中に收め行く世渡り上手の才子を亭主に持つに限るべし。

○次號豫告

同情ある諸兄姉より賜はつた玉稿がまだ山積して居ますので、早々御寄送下さつたのでまだ掲載しないのがありますが、次號には大概貴意に副ゆる事が出來る事と思ひまして、御詫旁々豫告致します。

△喜ぶべき現象　[illegible]
△小說北山おろし　一鵠 雲嶺
△短篇小說　二葉亭四迷
△題未定　加藤 眠柳
△題未定　安部 磯雄
△西洋禮式　石川 半山
△戰爭　草地 うら
△理想の進行　小野 有香
△男女競爭史　石川 旭山
△日本料理　高悦 幸子
△電車轢死　堺田 英子
△女傑傳　記者

海外時事

○濠洲に於ける婦人の勢力

「婦人の選擧權は社會政治と婦人の地位とに如何の影響ある乎」

去月十二日は濠太利に於て一の紀念日となりしならん、そは此日、聯邦の選擧行はれ、而して婦人が代議士を選擧するの第二回なればなり「マンチエスター、ガゼツト」のメルボルン特派員は、其の婦人が選擧權を獲得せる結果、婦人の地位及び一般政治の上に大なる影響を及ぼせりと言へり、

婦人投票の最強なるはヴヰクトリア洲となす、今回の有權者六十二萬三千八百六十五人中三十一萬四千九百二十人は婦人にして男子より多きこと實に六千なり男子有權者の多數なる所は殆んど稀にして、バルラヲト、ベンヂゴ等の鑛業地すら婦人の數多しといふ。

而して同特派員は政治家の參考に供せんとて左の結論を爲せり。

一、結婚せる婦人は多くの場合に於て良人と一致せる投票を爲す、是れ總ての階級に適用して誤らずと雖ども、別人種結婚に於ては全く之に反對し、同宗教の人を投票すること多し。

二、未婚婦人、殊に事業に從事する婦人は、大抵自己の好む所に從て投票し、家族の意志と反對すること多し。

三、大體に於て、道德家及び改革家の意見を標準として有益なる效果を齎せり、此の選擧上に於ける新元素は未だ革命を現出せざりき、然れども婦人の意見を以て正義となし、男子をして之に順應せざるを得ざるに至らしめたり

何れの國に生るゝとも、人間に變り無し、高等下女なりと迄で罵詈せられて、猶且晏如たる日本婦人よ、諸姉は此の記事を讀んで如何の感をかなす、

○英國婦人の示威運動

今より一ケ月程前婦人自由派の爲め、カシヤイア及びチエシヤイアの婦人勞働者委員、マンチエスター及びサルフオードの婦人勞働會議所員等によりて組織せられたる一大示威運動はトラフワルガー街に於て行はれたり、約五千名の群衆は同街の紀念碑を圍み、其の臺上高くコブデン、アンウヰン夫人、フランシス、バルフオーア孃、其他顯著なる選擧候補者數名を登らしめ、政治上に於て婦人を無能力とするに反對すること、及び政府をして此問題に關する議案を提出せしむることの動議は、デツケンソン夫人の提出する所となれり。而して婦人協同組合のパラス夫人も焔の如く熱烈なる長廣舌を振ひ、又スターリング、クーパー諸夫人等が各拔擢を兼ねたる演說あり、斯の如くにして此日の大示威運動は會衆五千の大喝采裏に終りたり。我國の婦人諸姉にして之を讀で肉動かざるは眞に己を知らざるものなり

○革命來!!

國運將に窮らんとして奄然たる大清帝國は今や革命の猛火に裹まれつゝあり。洋鄕の志士一度劍を按じて起つてより、湖南亂れ、曹州應じ、江陰、東阿、遼河西等相次いで憤を發しぬ。人之を以て或は匪賊となし、或は一揆となすと雖ども諸種の電文を綜合して竊かに考ふれば其意氣の猛烈なる、其秩序の整然たる、其運動の機敏なる、其兵器の精銳なる、其民を騷がさず外國人を侵さゞる等、誰か野人の暴動と見做すことを得べき。是等志士の中最も多數を占むるは軍人學生にして在日本留學生の如きも續々鐵腕を撫しつゝ歸國するが如し。暗雲常に覆ひても中々に搖ぐべうも見えざりし愛親覺羅の祀も今や將に絕えんとす。あゝ、革命來！革命來！吾等は隣國の民族革命と共に政治革命の一日も速かに成就せられんことを祈りて止まず。

日向ぼくり

山茶樹主人

△小さな雀、大きな猫

僕の獨居は、午前中は日當りが善くて暖かい、其の暖かい庭の片隅に、珊瑚玉の樣な赤い果を圍んだ萬年青と、眞珠の樣な白い實を持つた小さな梅樹とが並んで居る、其の後に稍丈の高い躑躅と、更らに一段高い柘榴とが立つて居る、それから少し離れてヅつと高い青桐がニヨキ〳〵とした枝を露して突立つて居る、其の簡單な、冬少疎々とした狹い庭は、小さな杉の生籬を廻らして居る。

其の生籬の下に、ガサ〳〵と靜かな音がする、机に凭れて心を物の本に奪はれて居た僕、フと頭を擧げて見返ると、可愛らしい雀が三羽、生垣の下をアチラにくゞり、萬年青の根をコチラに廻り、小さき嘴で何の餌かを啄ばむのである。

此頃の寒さで、庭は毎朝、霜柱を立て敷くのである。その毎朝の霜柱を、毎日の日光が午前中に解かすのである。今日も霜柱は解されて庭の土は柔かに翻れた、雀の腰は三里あたり迄で埋れる、その柔かい土を蹈んで、家の背後よりノソリ〳〵と歩を進めて來たものがある其は茶色の斑ある白い大きな老猫、三羽の小雀は之を見て驚いた、忽ち羽音を立てゝ、高い青桐の枝に、飛んだ。

其時、少し離れた、お隣りの時計が鳴つた、ボン〳〵〳〵四五六……十二、前の雀は何れにか姿をかくして、唯だ聲のみはチウ〳〵〳〵。

△男女醜類集！

身長の低い婦人が、高い高齒下駄を引づる樣に穿いた程、醜いものは無い、身長の低い男子が、高いシルクハツトを重さうに被つて居る程、醜いものは無い、色の黑い婦人が、白粉をボタ〳〵厚く塗つた程、醜いものは無い、顏の丸い頸の短い男が、でミ上げを剃り落してハイカラを付けた程、醜いものは無い、唇の厚い婦人が、口紅をコテ〳〵付けた程、醜いものは無い洋服を着た男が、澄した顏をして股のボタンを脱して居る程、醜いものは無い。

△何の不思議も無い

目白の女子大學が益々發達して、お茶の水の女學校が益々進歩して、女生一同が、天情體とやら云ふ踊りが甘くなる、着物の袂と裾が長くなる、髮飾から靴、靴下まで派手を盡くす、眼の使い方、口のきゝ方、足の運み頃、總てが巧者に、なまめかしく、麗にして且つ淫に傾くといふ噂、或人曰く、寧ろ當然の事さ、新橋、柳橋が目白、お茶の水に移轉しつゝありと思へば何の不思議も無いじやないか。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●西洋禮式

石川半山

私の樣な西洋の事を餘り知らない男が、西洋禮式の事を講釋をするのは、甚だガラにない次第で有りますが、同郷の福田英子女史から何か書けよとの御命令で有りますから、或る禮式の書物を參考として、西洋遊歷中の實驗に照らし、少しばかり書いて見ようと思ひます

訪問の時ベルを押す注意

西洋の家屋は、御承知の如く、案内を請ふベルが有りまして、押すか又は引張る樣に出來て居ります

格子戸をガラリと明けて、賴む若くは御免と呼び、内からドーレ若くはハイと答へて出て來る日本の家屋は至極便利で有りますが、又此の如く門戸開放主義の結果は、時々下駄や靴を盜まれる憂ひも有ります、然るに西洋の家屋は、何れも「人の家屋は人の城郭なり」と云ふ原則に從ひ、嚴重に門戸を閉鎖し、家人は常に鍵を有して、出入毎に其の鍵を用ひ、來訪の客は必ずベルを押すか、又は何か綱の如き者を引張て、案内を請ふ樣に出來て居ります、然る所此の案内を請ふ方法に、一定の習慣が有るから、それを心得て置き、無暗に押し又は引張てはなりません

私がニウヨルク市で或る婦人を訪問した時、案内鈴を押して見たが、トント通じないので、ヂレッたくなッて、無暗に五六回押した所が、中から六十ばかりの老婦人が出て來て、私を睨み附け

お前さんは我が亞米利加の禮儀作法を知らないね

とイキなり叱り附けられ、此の婆め、失敬な事を言ふと、腹が立ッたが、之を抑へて

勿論僕は日本人だから、米國の禮儀作法は知らないが何か間違ッたことが有りますか

と尋ねましたら、婆さんが說明し

大間違ひの大不都合です、凡そ紳士が案内を請ふには、十分強く長く一トツ案内鈴を押して其の答への有る迄待つ者です、少くも五分間は待つ者です、案内鈴をピン〜と二ツ鳴らすのは郵便で、ピン、ピン、ピンと三ツ鳴らすのは電信、四ツ以上ピン〜〜〜〜と續けて鳴らすのは、近火を報道する場合に限るので、今貴君が鳴らした樣に案内鈴が仰山に鳴れば、近所近邊の人心を騷がせるです

婆さんが苦々しげに私を責め立てたので、私も恐れ入ッた事が有ります、日本でも追々西洋家屋が出來て、案内鈴が多くなりますから、追々コンな習慣が出來るかも知れぬと思ひます

衣服にシワの無い樣に

日本では洋服にシワの有るのを構はずに着用して居る人が多い樣ですが、西洋では紳士貴婦人は皆チャンと衣服のシワの無いのを着て居ります

ヅボンの疊んだ折目の正しい者を着て居る者でなければ、紳士でないとして有る、日本の袴のヒダの崩れない樣に注意する如く、ヅボンの折目に注意するから、三四度も着て少しシワになると、直ぐに火ノシをかけに遣ります、此火ノシの事を英語でプレスと申します

上衣でもヅボンでも能くプレスに遣らなくてはなりません、シルクハットでも一度雨に逢へば、直ぐにプレスに遣らねばなりません

此のプレス代が中々高いので、或る友人が私に節儉の法を敎へました、寢る前にヅボンや上衣に水で霧を吹きかけ、寢る時に之を敷て寢れば翌朝はチャント筋も立ち、シワも直ほッて居ると言ひましたので、一二度之を試みたことも有ります

先づシワのない衣服を着てベルをビーンと一トツ押して、少くも五分間待ちそれから家内へ這入て、食事に取りかゝる迄に又中々注意が入ります、イヤ西洋のハイカラになるには容易な事では有りませんよ

●スミレの花

エデンの花守

＝バイオレットのこと＝

此花は近頃餘程作られるやうになりましたが元來純粹な西洋草花であります。西洋の詩歌文章の中によく見出されるバイオレットのことで今迄イヤ―今でも―之を普通の菫のことゝ思ふて居る人が多いやうです、といふのはバイオレットを譯して單に例の星と仲のよいスミレとして居ますから、間々路傍のスミレを摘んで「このスミレに匂は無い」といふ人が多いのでも分ります。ところがバイオレットは別物で元來日本にはありませんのでした。それで今は輸入して花戸など隨分と作つて居りますが、此頃から二三月へかけて盛んに一重や八重の白又は紫の花を咲きます。彼等はそれを摘んで帝國ホテルを初め外人又は所謂高等な旅館や料理屋へ賣るのです。ホテルではバイオレットの花を買ひ入れて食卓上の瓶又たはコップに幾個も挿して置きます。すると匂ひが高い花ですから佳い香氣を送りますし、可愛ゆらしい花ですからそこらを飾りもします。なほ食後それを一輪づゝ襟へ挿して歸へる人もあるといふ風で、花の需用は鉢植の觀賞ばかりに止まりません。

此花の匂ひはどンなであるかといへば例のスミレ墨汁、スミレ石鹼などいふもの、匂ひに違ひありませんが、われを度合良く、而も可愛らしい美しい花から馥郁とをくッて與れるのですから又た格別です。ところが日本には隨分とスミレの種類はありますが、大抵匂ひがありません、中に肥後スミレなどいふ香氣のあるのが二三種ありますれど高山か何處かにある至極栽培仕難いものである上、香氣は良くても淡い。尤も藥學者羽田氏と山下氏とが見付け出された日本產のスミレの一種は、誠に香氣の高い栽培し易いものだと聞いたから、或は園藝品として有力な地位に立つ樣になるかも知れませぬ

バイオレットは草苺のやうに莖を出します。先づ日本のツボスミレみたやうです。で此の莖を節毎に切つて挿して置くと節の間から芽を出して、後々は一本立のスミレになります。冬は寒氣を凌いでやらねばイケませんが、一重咲のならば南向の日當で霜の下にせず、霜さへ除ければ大丈夫育ちます、けれど八重の方は東京を中心にして先づ箱室か溫室か、掘り込み室でなくば難かしいでせう。

バイオレットの葉は圓く心臟形をなして居ります、莖を伸び放題にして置けば別ですが、咲くやうに仕立てたのは、昨今鉢の中から葉柄やら莖やらに三四寸ぐらゐの上にハート形の葉を捧げ、その間から矢張日本のスミレ即ち角力取花のやうなのを飾つて居ります色は冴ませぬが、全體の形といひ咲いて居る工合といひ、これがあの矢釜しい花かとも思はせます。

此花を栽培するには前に云ひましたやう、暖い日陰におしらふた砂の中へ挿芽をし、砂は始終濕らして置くとよいですが又た種子を播いても生えます。併し古いのは生えませんし、普通種子を採るより花で賣りますから、種子屋のは主に外國から輸入した古いのばかり、隨つて之を買つて播くは先づ考へ物です。それより一本の苗を得て限りなく繁殖するがよいでせう、土は與土に砂の少しと、腐土播種土の腐つたのとに灰を混ぜればよく、肥料は油粕は一番よけれど、他の水肥を葉に掛けないやうに與るも妙です。

自覺の涙

春々子

年は新たに加はりて
　自覺の浪ぞ湛たへ來ぬ。
意氣は男子の立場にて
　節操ぞ女子の生命なる。
主義の爲には親を捨て
　戀の爲には家系を絕つ。
あゝ革命の健男子
　女神化身の女丈夫よ！。

諸新聞批評

▲神戸又新日報、現代の女傑福田英子女史主宰の下に發刊された「世界婦人」なる雜誌が着した「新年所感」なる中に婦女字がある、社會主義の側から出たものだが面白い。

▲名古屋扶桑新聞。婦人の社會改良運動の機關として生れしものなりと。

▲函館每日新聞。巾幗女傑の一人とまで名を馳せたる昔の景山英子を主筆として生れたるものは本誌也。健全なる發達を望む。

▲福島民友新聞。[illegible]、其他婦人に關する記事を掲ぐ主筆者が、主筆者なれば有りふれたる雜誌と同一視すべからず。

▲近江新報、妾の半生涯にて有名なる福田英子女史が婦人の社會運動の先驅として勇ましき名乘りを揚げたるもの、熱烈燃ゆるが如き[illegible]は其筆鋒に現はれたり矣、石川雨京の議論は流石に[illegible]中の華なるべし、吾人はかゝる眞面目なる婦人運動の[illegible]を聞くを喜ぶ。

社告

本號は大變遅れまして讀者に對し誠に相濟まぬ次第で御座います。今度中[illegible]がましうございますが、編輯者が[illegible]中ばより[illegible]に[illegible]され[illegible]しましたので[illegible]かに[illegible]を[illegible]めるなど[illegible]に斯の如き不仕末を來したのであります。ですから、[illegible]の[illegible]はないのは勿論の事、心中[illegible]に[illegible]して居りました事もすつかり[illegible]に[illegible]して[illegible]ひました。[illegible]からは[illegible]に[illegible]致し、いろ〜[illegible]を出して、[illegible]に[illegible]する積りです。これまでは[illegible]い論文が大部分を占めて居りましたが、これからは、短い、小さい興味のある[illegible]を多く載せるやうに致しませう。

[illegible]は[illegible]も[illegible]に[illegible]つて居ります[illegible]ずを分けて[illegible]して居ります。[illegible]の[illegible]はどうか[illegible]なる[illegible]を[illegible]下さらん事を祈ります。[illegible]二號[illegible]氏の[illegible]小說は[illegible]に[illegible]ける[illegible]でしたが[illegible]より左の如き[illegible]が來ましたから[illegible]しからす。[illegible]の工合よろしからず、今度はどうしても[illegible]まで[illegible]した[illegible]に[illegible]ますが[illegible]へ[illegible]しました[illegible]ます。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

美はしき奴隷よ
（三越呉服店の前に立ちて）

山口孤劍

五彩爛燦たる天上の虹を截つて之を紡ぎたるか、妾美はしく匂高き地上の花をあつめて之を織りたるか、輝くばかりの玻璃の園ひに、友禪よ、縮緬よ、帶よ、小袖よ、目も眩むばかり、我はむくつけき男子なる暫しは三越呉服店の前に佇立せり。

年の暮とてか、貴夫人と稱する多くの『美はしき奴隷』は其の門邊に集ふめり、天鵞絨の外套に綺麗なる花柱の帽子をつゝみたるもあり、孔雀の尾の如き長裾を曳きて、古金襴の帯胸高に結べる、寶石の胸飾りよ、金剛石の指環よ、騰虎の襟卷よ何れか現世の虚榮の杯に口觸れぬものかはある。

『美はしき奴隷』はあだかも天の王國に遊べるが如く、其の薔薇の如き紅匂へる頬に微笑をたゝえつゝあるを見ずや、春日の長きを知らず、秋宵の短きをかこち、舞踏、演劇、花見、遊山に貴重なるタイムを忙殺しつゝある彼女は、此處を天堂とし極樂として、飽くなき虚榮の酒に親みつゝあるなり。一身を以て美術展覧會の會場となせば、彼女の願足る。

されど思へ、同じくかよわき花の少女の身に落ちて、粉塵雪片の如き工場の裡に惡魔の呪の如き器械の下、血よりも苦き熱汗はたぎるばかり、齒車のひゞきに生命の花も凋れ行きて、夕風になびく汀の蘆の葉よりも青き顔せる工女は、あはれ先きの世の罪の報ゐか、あゝ之れ全能全善なる上天の攝理なる乎。

花摺模樣の友禪縮緬よ、金絲の縫の帶よ、小袖よ、其の價は千圓か、數千圓か、之れを購ふ貴夫人は、嘗て自ら製造したりしものなりや、あらず、肺病の梅菌を空間と平面とに宿す汚穢醜陋なる工場に幾千の工女が健康と智識と生命を消耗して作りしものにはあらずや而してこの贅澤品は之を作りし工女の所有品となりしか、君見よや、工女と稱する吾人の姉妹は常に乞食の如き襤褸をまとへり。

いま二頭立の馬車を驅つて來れる貴婦人の從者と覺しきが、店の玻璃戸の傍に佇めり、余は顧みて馬車を眺めぬ、馬車には華美なる繡の馬具を着けたり、一人の從者は鞭をいぢくりつゝ立てり、馬は卯の花色の白馬にして、車は光燦ける黒塗の鏡にも似たり、あゝこの綺麗なる馬車を作るが爲めには、何千日といふ日子を費さゞるべからずといふ、其間勞働者と、老人と、壯丁と、工女が此の一つの馬車を作るが爲めにいかに其の生命と幸福を貢獻せしか、暗愚と遲鈍と無氣力と傲慢なる一婦人の爲めに、吾人の同胞の何千人は精力と希望を滅盡しつゝあるにあらずや。

思へ彼の馬丁と馭者を！暴風に恐ぢぬ高原の欅の樹の如き剛健なる體軀と、骨太き掌を見ずや、彼等決して都の人にあらざるべし、苛き税と高き小米料に、村にも居たゝまらず、墳墓の地を脱して、富を求めて都に入りしものにはあらざるか、虚榮よ、零落よ、成功よ、失敗よ、人生の哀史は收めて三越呉服店の店頭に在り。

余は此の『虚榮』は笑ひ『零落』は泣く店頭に瞑目して立てり、恰も人生の悲劇に對せるが如く！

濕氣を帶べる灰色の霧は高き甍をつゝみつゝ、街は蟻の如き同胞を群集せしむれども、都は今したゝ黒き夕の被衣を投げぬ。

露々子

虚榮の弱き化身と譏れかいふ
火の洗禮を浴びて下し我は
新らしき世紀の波を我れ浴びぬ
白き腕に赤誠つゞるべく

世界婦人の發刊を祝ひて

藤なみ子

福田夫人閣下

從來我國に於て、婦人の德を稱讃するに、閨秀、深窓等の辭を以てし、奥樣、御臺所、お家樣等の語を以て、妻たるものゝ敬稱としております、こは即ち婦人とは家の奥深く隱れ、臺所の隅にひそみて、他を顧ざるを以て此上なき美と思意せる者ではありますまいか、私は如何なる務めも之に從ふに、正義と誠實とを以てせば必ず皆神聖なる事を信ずるものです、故に天下を治むるも臺所を整理するも其職に於て上下なき事を感じます、されどまた必ず婦人は家庭を唯一の領土とし、男子に依賴して其慰藉たるべきものなりとも思ひませぬ、即ち婦人は家庭の人たると共に社會の人たる事を信ずるのです、近來家庭と婦人なる言は一の流行語の如くに常に耳にする所であります、然れども社會と婦人なる言葉に至ては其聲甚だ微にして聞く事が出來ません、さるを茲今に計らずも世界婦人なる天籟の聲に接しました、我等臆病なる婦女子には深夜の警鐘の如くに驚嘆せざるを得ません、我等婦人は永年の習慣と遺傳のために心身ともに束縛せられて、其欲する所に行き、其願ふ所をなさん事を冀へど其の肢指は縄目の苦痛に堪へず、其精神は啻の響を恐れて、自ら立つ事能はざる勇なきものです、ひたすら示導者の敎に從ひ、其手にすがりて、此苦境を遁れん事を待ちつゝありました、今思はずも勇壯なる鋒火の大空高く輝くを見て欣喜に耐へません、謹で健全なる發達を祈ります。

伊藤證信氏書翰

此は妹より本紙上に寄稿を願ひ出でしに答へ給ひしもの、之に對しては次に少しく御返答申したく存じて居ります（ひで子）

拜復、度々御手紙頂有存じます、小生先便御斷り申上げたのは決して謙遜ではありません、實際な其實問題したのであります、あの時には新紀元の廣告文を見たゞで貴誌の目的が那邊にあるか分らず「世界的解放」の語意も判明せざりし爲僞りに貴誌の意見が小生の意見と同一なりと見做してあゝ云ふ御答へをなして置きましたが、今度送つて下さつた趣意書を見て貴誌の方針がほゞ分明になると同時に小生は貴誌と全く女子に對する（否寧ろ人生全體に對する）意見を異にして居ることが明になりました、同意見を持しつゝ、たゞ修養が足らぬから書けないと云ふことに過ぎなければ、こう幾度も勸められゝば其御厚意にめんじてなりとも御言葉に順はねばならぬのでありますが、斯く意見が根本的に異ろとして見ると、小生が書いては却つて貴誌の害になるばかりであらうと存じますが如何でしよう

其意見の違ふと云ふのはこうです私も婦人否人間の絶對的開放と云ふことが我々の理想であると云ふことには異論ありませんが、私は貴姉の樣に、人間を束縛して居るものは法律や習慣や道德や不平等と云ふ樣なものとは考へないで、自分々々の心の中に「樂がしたい」と云ふきたない私欲があるから此私欲が我々を束縛して居るのであると信じて居るのです、此世界は客觀的に云へば寧ろ不平等と云ふのが當り前であらうと存じます長の高い人と低い人顔の圓い人と長い人壽命の長い人と短い人達者な人と弱い人、暖國の人と寒國の人と云ふ樣に天然が悉皆不平等に出來て居るのを見ても分るでしよう、處で此不平等と云ふとは決してわるい事では無い却りて趣味ある世界の裝飾となるのです、これを不足に思ふた日には此世界に住んで居ることも出來ないであらうと思ひます人間わざで無理に少し位い平等にして見ても大部分が世界構造の大體でから不平等に出來て居るのだから一向益に立つまいと思ゐます、不平等がわるいとか法律がわるいとか習慣が惡いとか思ふのは畢竟自分の心に「樂がしたい」と云ふ放埒な思ひがあるからです、世界其物は神の顯現であつてたとひ塵一つでも粗末にすべきもの、あるべき答はないのです、それがわるく思へるのはこちらの心がゆがんで居るからですけれども有難いことには、此心のゆがみは日々の刺激經驗と云ふ神の惠みによりて段々と直つて行くものです、人生に處する目的は一に只此心のゆがみを直して貰ふにあると存じます、婦人の開放と云ふのも人間の進歩と云ひ解脱と云ひ革命と云ひ理想の到達と云ひ決して他に少しもあるので無い此心のゆがみを直すことにのみあると存じます。して見れば貴姉等は他の社會主義其他の人士と同じ樣に革命の意義を外界に認めて居らるゝし小生は全然之を内に見て居りますから此點に於て非常に方針を異にして居るのであります

か樣に意見を異にして居ますから寄書の件は宜敷御斷り申します況んや前書申しました通り私は人を敎へるのはまだ何となくやましき點あるに於てをやであります けれども私はあなたが雜誌發行を爲され且つ御運動なさるのに對して少しも惡感はもちません否之も小生の所謂玉ふ神の恩惠の一つと思ふて滿腔の尊敬を捧げます況んや貴姉の如きは小生どもよりずつと年も多くあらゆる世の辛酸をなめ經驗を經て來ていらつしやるのであるから一世の師表となりて世を指導なさるゝには充分でありましようぞ御實行になりましたら本校へも一部づゝ御送りを願ひ度う存じます

已上くどくしく所感を述べました、若し間違つた點が御氣づきで御座いましたら御敎訓を願ひますさようなら

十二月二日夜十二時　伊藤生

福田大姉　侍史

清國呉弱男女史より

女史は現に青山女學院生徒で、秀才の譽高き人であります。彼の有名な袁世凱の姪で、而かも革命の大理想を抱いて居る、まだ十八歳の處女であります。本書は其の郷里南京より送られし書面であります。

福田女史御覽、私自回國以來未嘗上書問候、甚覺疏忽、想別後御體清吉、私自歸來至今猶病、近數日私病稍愈、大約十二月可以回東京青山女學院、月前接到宮崎寅藏君賜下之「革命評論」私拜讀之下、喜極如狂、我警東亞有如此之警鐘、何委他日吾東亞之國民不醒起、步歐西亞之後塵、建獨立之旗於二十世紀之大舞臺、揮自由之鞭於新世界耶、私所最恭者即見我支那國民醉生夢死、不知革命爲何意、社會主義爲何物、社會革命爲如何、以社會主義如蛇、嗚呼、一國之民如此之腐敗、如此之無學、今何能立於如此之優勝劣敗之時代、而不爲人之牛馬乎、私每一念及、未嘗不痛哭流涕數行下也、貴女史具救世之精神、具高上之學問、將來必能救我東亞、私每懷及貴女史苦心亦精神爽快焉、

ダケドウジユウレスホフモン十月寄來一稿云、十一月其時在ニユヨーク、New York city 開追悼支那炸清五大臣者烈士吳樾會、ホフモン君用英語演說其人之歷史及目的、私得此信甚喜、特感謝ホフモン君、非特支那一國之特色、亦、我東亞之特色也、此候　吳弱男十一月十二日

○同情語録

△世界婦人御發行御目出度ふ、希くは合理の道に對して一歩も譲る事勿れ、至禱々々（白柳秀湖氏）

△世界婦人御送附下され御高情のほど厚く謝します、向後も益〻御發展のほどを希願します、私も出來得るだけ讀者を勸めます、先づは取りあへず御禮まで（神川松子氏）

△世界婦人拜讀致し申候處何れも同情の感に堪へず候、第一號第二頁政治上に於ける婦人の要求の項に、政治上の自由を得んとするの請願を帝國議會に提出せんとの事、妾とても權利と義務とを有する上は、同志と共に請願せんの志に候間、何卒請願用紙十四五枚御送り被下度御願申上候也（福田ユキ子氏）

△御發「世界婦人」の發刊を祝し申候（平林もとゑ氏）

△前略——世界婦人印刷所に相成候へば十部位御送り被下度然れば所々有志へ頒布可致候、先づは御願迄（福田興作氏）

△拜啓陳ば、世界婦人の御發刊を御祝申上候、初號より毎號御送り被下度當地方へ購讀者御紹介も申上候（與石伊三氏）

△謝略——小生は往年貴姉大阪事件の時郷里山梨にありて、小生發企者となり多少の慰問物等を差入寄贈したることも有之、又「愛國」と題したる政治雜誌に、東洋のジヤンダークとして連載したることも有之候。目下小生は講習以來事業の傍、癩疾患者同情會なるものゝ主となり、彼等に救育保護致し居り候、終生を此の事業に献身する決心にて目下は實業に從事しつゝ居り候。次便に近況御送り申候間乍一餘白に御掲げ被下候はゞ幸甚の至りに候、拜具（同上）

△世界婦人新刊行を祝し申候（小笠原鶴代氏）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

誰が爲の藝術？

木下尚江

西洋畫家山田松次郎の畫室
伯爵金澤家の家令横尾無久平來訪

横尾『で、豫ねて君にも言ふた通り、今度の宴會と云ふものは、當若主人新婚の御披露なんで、三日に亘る大催ふし、お客の種は云へば公侯伯子男の華族を始め、何れも朝野の貴顯貴婦人、先づ日本で一粒撰りの上玉と云ふ者だ、其の晴れの客間へ掛けて貰へるのだから、畫工の身に取ては上無しの名譽と云はにやなるまい、當前ならば君のような名も知れない畫工なぞに書かせなくとも、書かせて欲しいと頼んで來る上等の畫工が山のようにあるんだが、若主人が何處でか君の書いたものを見たとかで、是非彼男に書かせよと名指しの命令だ、で、已むを得ず斯様裏店の汚い所までわざ〳〵車を運ばしたんだ、然るに君は承諾して置きながら半歳過ぎても未だ書かない、此の横尾無八平、最早何度催促に來たと思ふ、謝罪でもすることか、やれモデルの氣に入つたのが無いで御座るの、興が湧いて來ないで御座るのと、勝手な熱を吹いて洒唖々々として居るんだ、主人に申上げれば主人は又た「いや眞正の畫家は然うなければならぬ」など、腹も立てずに恐悦がつて御座る、眞個の畫家と云ふものは、こんな汚い乞食小屋に屆んで、そんな勝手な虚言を言つて居るものかい、え、山田、をい山田君、君は其れでも可いかも知れないが新婚の披露と云ふ大事件を控へて居る我輩になつて考へて呉れ給へ、最早これ一週間に差し迫つて居るのに、まだ一と筆も付けて無いじやないか、それでも君、間に合はせると云ふのかい』

山田『若し書けなければ、お間に合はないかも知れませぬ』

横尾『をい、何だと』

山田『然かし興が來さへすれば、今夜中にも出來ませう』

横尾『をい〳〵山田君、冗談言つちや不可よ、裡體の女一つに二千圓出そうと云ふのだよ、それを君一と晩で塗たくられたりなんぞして堪つたものかい』

山田『では如何すれば可ろしいので御座いますか』

横尾『如何すれば可いかつて、拙者が其れを知るものか、拙者は金澤伯爵家の家令だ』

山田『可う御座います、安心してお歸りなさい』

横尾『驚いた男だな、不愛想にも程のあつたものだ、そんな心得だから名も知られずに貧乏して居るのだよ、邸へは若主人がこんなことが好きなので、畫家だの何だのつてものが年中入りびたつて居るが、皆んな氣の利いた如才ないものだぜ、君もまだ三十だ、まあ少し魂魄を入れ替へて折々御機嫌伺ひにでも來たら如何だい、あの通り若主人は君の腕に惚れて居るんだから、君の出よう一つで如何にでもなるさ、それに又た拙者と云ふものが陰から宜しく取りなせば、君だつて何時までも斯様貧乏暮らしをせんでも濟むんだ、なあに君、華族の身代なんぞ稼いで儲めたと云ふでは無しさ、お互に一つ暖まる工夫をしやうじや無いか』

山田『何卒もう、お歸り下ださい』

横尾『そんなに言はなくたつて、誰もこんな所に長居なぞしやしないよ、じや、君きつと間に合はせるだろうな、最早一週間しきや無いのだよ』

（山田は返事もしない）

横尾『禮儀も作法も金儲けも何も知らぬ馬鹿者に、二千圓とは勿體ないことだ』

（横尾は獨語しながら歸り行く）

山田『あゝ、よう〳〵晴々した、彼奴の面を見ると胸の上を蛙にでも這はれるような氣がして、息きでもつまりさうだ——然かし如何も困まつたことになつたわい、只だ最初彼奴の持つて來た手紙を見た時、不意と知己の感に打たれて何の思慮も無く承諾して仕舞つたが、聞いて見ると華族だと云ふんだ、華族つて奴、見たばかりでも虫に障つてならないんだが、引き受けちまつたので仕方が無い、——尤も書いて見たいと思ふものはあるんだが、とうも思ふようなモデルが無い　其れも無理の無いことだが、どうせモデルになろうつて者に、此方の注文するやうなのがあろう筈も無いのだが——』

（此時戸外にモデル周旋婆お熊、少女花子を引つ張つて來る。）

お熊『何だね、お花さん、お前さんだつて最早十八になるんじや無いか、今時の娘がソンなに耻づかしがつて如何するんだね、只だ裸體になるだけのことだものお風呂へ行つたと思つてりや濟むんだよ』

花子『だつてお婆さん、私何だか怖くてしようが無いんですもの』

お熊『また泣くのかね、困まつた赤兒だよ、何も取つて食ふと言ふじや無しさ、只だ其の奇麗な體を默つて立つてさへ居りや可いんだもの、世の中にこんな樂な商賣がありますかね、まあ能くお聽きよ、此の山田さんと云ふのはね、腕は良と云ふ仲間中でも評判だけれど、若いに似合はず人間が時候後れなので一向流行しないのさ、其れが如何してか、あの伯爵の金澤さんね、お前さんも新聞で見たでせう、御婚禮の御披露の前觸れを、其のお客間だとか應接間だとかへ掛ける大きな畫を此の山田さんが頼まれなすつたんでね、先喝からモウ十何人も連れて來んだけれど、何だ蚊だと氣むづかしくて納まらないのさ、其れで無理にお前さんをと思つて、さん〴〵口説いて來て貰つたのさね、普通なら何もこんな貧乏畫家に骨を折るにも及ばないのだけれど、二千圓の仕事だと聞いて見ると、棄てゝ置くのも勿體ないじや無いかね、お前さんにした所で、手仕事なぞして居るよりか如何なに割が可いか知れたものぢや無い、お母さんにだつて藥も思ふ存分上げられるしさ』

花子『お婆さん、私只だ其ればつかしに來たんだわね、こんな耻づかしいことも——』

お熊『ほんとに、お前さんは孝行娘だよ、昔時は親の爲めなら浮川竹にさへ身を沈めたんだもの、裸體になるくらい、何でもありやしないよ、何しろ評判の氣むづかし屋なんだからね、涙なぞ拭いてね、機嫌の良い顔して行つてお呉れよ』

（兩女入る）

お熊『先生、今日は、相變らずお考へ込みですね、お約束の上物を連れて參りました、是れでお氣に入らなけりや、私もう死んで仕舞ふ外ありません、——何だね、お花さん、そんなに後ごみばかりするもんじやありません——お氣に協いませぬか、先生』

山田『——ウム、——ウム、——可し、可し、可し、——有難い』

お熊『何ですね、先生、では御意に協いましたんで御坐んすね、貴方よりも私の方が何程有難いか知れたもんじや無いですよ、先生、此女の爲めにはドンなに骨を折つたか知れないんですよ、先生、心得てゝ下ださらなきや困りますよ——をや〳〵此方の言ふことなぞに一切お構いなしなんだから情無いや——さあ、お花さん、お前さんがお氣に協つたので、先生は最早仕事にお掛かりなさるんですとさ、お前さんも早く帶をお解きなさいよ——ま、何だね〳〵此の女は、又たそんな泣いたりなんぞして、今となつて其樣顔したつて如何なるもんだね、時間で賣つた身體なんだもの、さッさと着物をお脱ぎなさいよ』

山田『——時間で賣つた身體——時間で賣つた身體——』

お熊『何を愚圖々々して居るんだよ、お花さん、阿母あが病んでゝも滋養も食べさせられないと言ふから、私が此方の先生へお頼み申して連れて來て上げたのじや無いか、御覧よ先生は最早仕事のお仕度して待つて居らつしやるじや無いかね、早くお脱ぎなさいよ、裸體になるのが何だい、脱がなきや私が脱がして上げよう』

お花『御免なさいまし、お婆さん、何卒御免なさいまし』

お熊『ほんとに譯の解らん女つてありやしない、私に謝罪つても仕方がないよ、此家の門を入つた上は、もうお前さんの自由になる身體じや無んだからね』

山田『——時間で賣つた身體——時間で賣つた身體——』

花子『あれ、お婆さん、何卒是れだけは御免下ださいまし、襦袢だけは何卒御免下さいまし』

お熊『こんな世話の燒けた女を見たことが無い——まあ、先生、御覧なさいましよ、此の眞白な奇麗な身體を、まるで其處にある石像のようですのね』

山田『——時間で賣つた身體——成程——成程——』

お熊『わら先生、厭ですことね、目を瞑つて何を又たブツ〳〵言つて居らつしやるんですよ御覧なさい此女の奇麗なのを、此の汚さいお部屋に此女の僻しになつてる所は、さうですね、掃溜に一と塊殘つた雪とでも言ふんですね、なか〳〵可い見立てゝせう、まあ消えて仕舞はない中に御賞翫なさいましよ、

（七頁へつゞく）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

日本料理

嘉悦孝子述
津川千代子筆記

　いんげん豆のきんとん

隱元豆はつぶよりと云つて買ふがよろしうございます。それをよく洗ひまして、なまぬるの湯の中に入れて煮ます。煮えたちましてから、五分間ほどたちましたら水を少し入れます。これをしわのばしの水と申します。それが煮えたちて又二十分間位たちましたら、其湯をすてゝ外のなまぬるの湯とゝりかへます。かやうに三度ばかりいたします。でないと豆に赤みがついていけません。それから三度目からはなるべく火をよわくして煮る。煮えたらその四分の一ほどをとりわけてうらごしにかけてこします。そして外の四分の三の粒の方は、湯をしたみまして、砂糖百二十目（豆五合ならば）水を茶碗一杯位、鹽少しとを入れて、あまり強くない火で煮まして、その汁が半分位になつたとき、前にうらごししたのを入れて煮あげます。これを器に盛り上に紅糸をかけます。

　紅糸

じやがいもの皮をむき、うすく切りゆでまして、砂糖と鹽とで味をつけ、うらごしにかけてこし食料紅を水にてとき、その中に入れよくかきませ引筒の中に入れてしぼりながら前のきんとんの上にかけます。

　がんせきたまご

まづ鷄卵を一人前一ッ半位宛の割にして水から入れてうでゝ、水にとり皮をむき白みも黄みも一緒に手にてめちや〳〵にこわし、たまご十個に砂糖二十目程と鹽少許りとを入れ、よくまぜ、みの紙に包み其の上を布巾で包み、鬼すだれでまいて、少し重しをかけて三十分間ほどおき、小口から切ります。

　松風魚

魚は何魚にても三枚におろし適宜の大きさに切り、醬油に二十分間ほどつけておき、後醬油からあげて日光に干しますと水けはかはいて表が少しねばりけを帶びてまゐりますから、その時上にけしのみをふりかけて、串にさしけしのかゝつた方からさきに燒きます。

以上三しなは盛り合せて口取りにつかひます。

　さばのこぶじめ

これはさばには限りません、何魚でも赤みの魚の外はよろしうございます。こぶは魚の長さ位の巾のこぶで一尺程に切りよく洗つて酢につけておきます。さばは三枚におろし小骨をぬき、鹽をふつて十分間ほどおき鹽を洗ひおとし五分間ほど酢につけて皮をむき、縱に二三分位に切り、前のこぶの酢をしぼりて廣げ、切りたる魚を横におきてこぶにてまき、そこへ又魚をおきてまき、かやうにして一寸程の丸さにまき、それを重箱か箱のやうなものに入れ中に入るふたをして少し重しをおき、後に五分位の厚さに切り、一人前に二ッ位つけます。そのわきにわさびをおろして少しつけ合せます。これは別に酢はいりませんが、好みで、三ばいすか又はたゞの酢でも外の小皿に入れて出してもよいのであります。

新刊紹介

▲懺悔（木下尚江著）　眞に「我」を得んと欲せば先づ全く「我」を棄てざるべからず。此書「我」を棄てんとして却て極力我を庇護せしが如き切に著者の爲に取らざる所也。さはれ其小說的技巧と文章の麗妙とは著者の特色を發輝して吾人の推稱する所也。（京橋區五郞兵衞町金尾文淵堂發行定價三十五錢）

▲愛火（泉鏡花著）　新作の戯曲也。われに批評の筆なし。只其凄艶を稱ふるのみ。科白の如き流石に自由なもの也。（本郷千駄木林町日高有倫堂發行定價七十五錢）

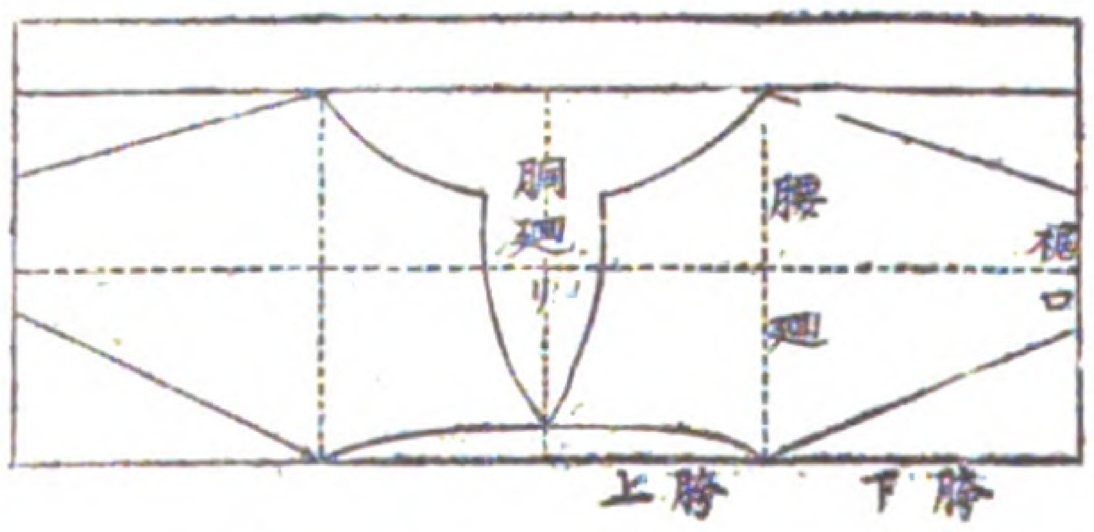
▲新化粧（佐々木醫學士著）　現代の化粧法の幼稚なるを矯めんとて、著されしもの、說明叮嚀にして餘蘊なきが如し。（本郷千駄木林町日高有倫堂定價四十五錢郵稅六錢）

婦人股引の裁縫

軍地うら子

婦人股引を裁縫致しますには第一胴廻り腰廻り胯上胯下の寸法を當りて積らねばなりません而して其寸法に伸縮あるのは當然であります唯今申上るのは普通婦人の着用に適して居ます

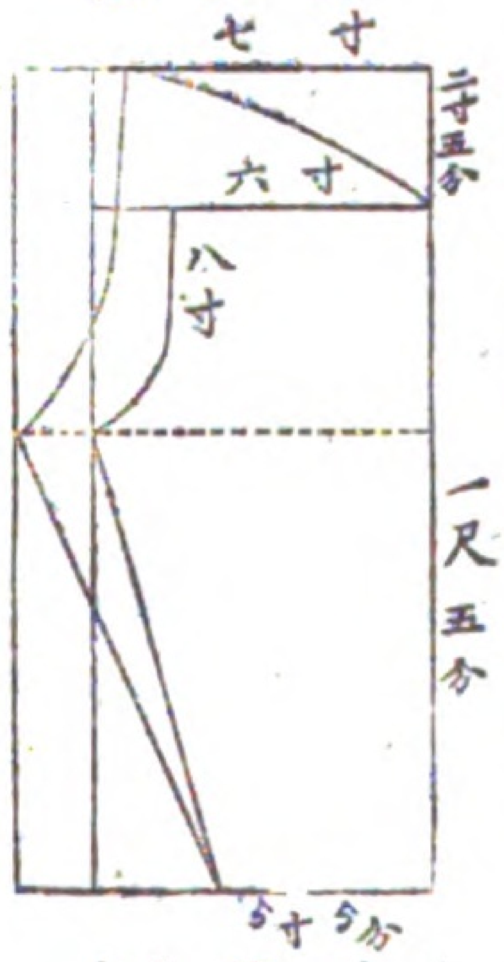
第一圖



第一圖は巾一尺九寸長さ四尺二寸のフランネルを以て婦人股引裁方であります始め二寸巾を裁ち落して紐と致します、次に殘りの丈を二つ折にいたしまして一方八寸巾に度りまして四つ折に致しますと第二圖の如くなります

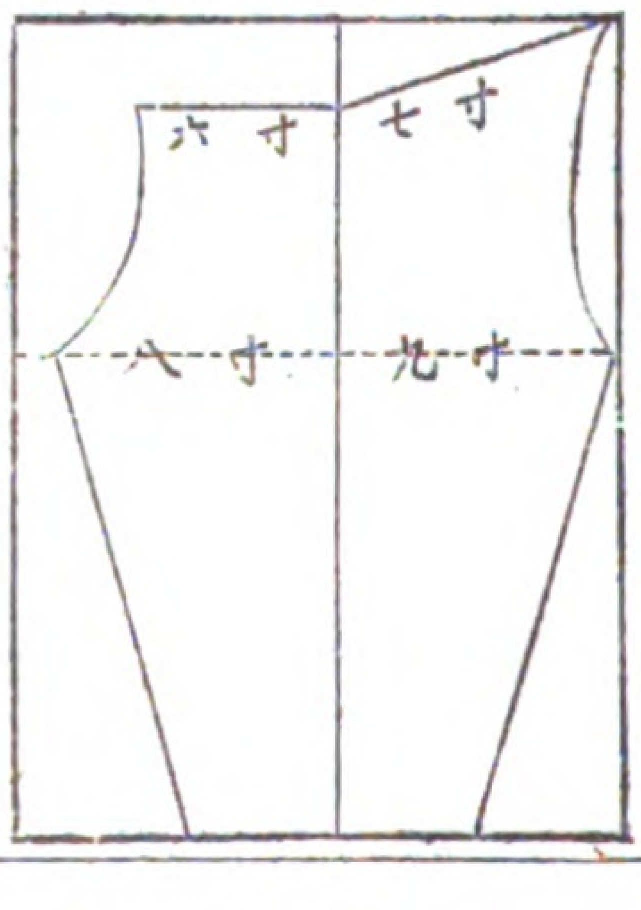
第二圖

第三圖



夫より、第三圖により圖の如き寸法に印をつけましたなら後身の巾廣き方を裁落し二枚を殘して前身頃を裁ち落します即ち第四圖であります

第四圖



縫方

始め胯下を縫ひます折は前身に返しまつり絎にし左右とも出來ましたなら胯上即ち前より腰上を二つ折に致しましてフランネル單衣の裾の如く千鳥縫にいたします次に右の前身を左に一寸程重ねて紐を付て出來上ります即ち第五圖は仕立上りの圖であります

第五圖

誰が爲の藝術（六頁より續く）

さようなら』

花子『お婆さんも居て下さい、お婆さん』

お熊『え、外聞の悪るい』

　取りすがる花子をお熊は突き倒ほして戸を閉ぢて出る、

『まあ、是れでお金の毫も取り損こなはずに濟みました』

　と笑いながらにお熊は歸る、

山田『あゝ、誰が爲めの藝術？』

　と山田は目を開いて凝と其處に倒れて泣き居る花子の上に注ぐ

『貧に苦む處女の羞耻を金に替えて、上流社會と自ら名のる懶惰の男、高慢女の玩具を描く、藝術の神聖が何處に在る？』

　左手に握んで居た畫バケをピシりと折つて壁に投げつけた、

『娘御！』

　と跪きながら、泣き崩れ居る花子をシカと抱き起こす

花子『先生、御免下さいまし、何卒先生御免下さいまし』

　と全身を縮めて打ちわなゝく

山田『いや〳〵、最早驚きなさるに及ばぬ、決して驚きなさるに及ばぬ、拙者は最早貴女を悩める畫工では無い、一分前の畫工では無い、今は全く新らしき山田松次郎、何卒娘御赦して下さい』

花子『何卒先生、放して下さいませ』

山田『や、是れは失禮、少こしも心着かずに居りました、さ、さ、お歸り下ださい、お歸り下ださい、先刻チラと承れば母御が御病氣で居らせらるとか、定めし御心配のことで居らつしやいませう、さ、さ、早く歸つて安心させてお上げ下ださい、こゝに在る此の一と包は先刻金澤の家令が置いて參つた言はば貴女の身の代金、元より汚れた金ではあるが、今初めて清淨の貨幣となりました、何卒お持ち歸り下ださい、母御の藥餌の料にも使つて下ださるならば、天には必ず喜びの歌が響きませう、——あゝ、誰が爲めの藝術？天地一新するまでは誓つて再び汝等と面を合はさじ！』

　畫具もハケも手當りまかせに擲り投げ踏みにじりて夜叉の如くに狂いまはる

『あゝ十年の虛僞の生活から、今ま初めて救はれた、おゝ我が花子！、我が女神！、我が救主！』

　と茫然と眞直に立ちたる花子の足下に平れ伏して、滿なす熱淚に其の白き足を潤ほした

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

於内外大博覽會受領 名譽金銀一等諸賞牌

體操及び運動器械
樂器及び教育用品
生理學模型
博物學標本

日本東京市本郷區本郷五丁目 特電下谷八四五

宮内省諸官衙、大學、師、中、小學
清國大學堂、師範學堂 御用

美滿津商店

昨年來より増築中の陳列所落成候につき聊か陳列致し置候間御序の節御一覽御用命を乞ふ

商店改築大擴張

カルタ歯磨は口中にある諸種の細菌を殺します
カルタ歯磨は歯牙のゆるみを緊縮するの効がある
カルタ歯磨は口内の悪臭食物滓渣の腐敗を防ぐ

絹手巾種々
造花類種々
西洋小間物

東京市京橋區尾張町二丁目八番地 電話新橋二七六七番

光明堂

カルタ歯磨はアルカリ性なれば口内醱酵を防ぐ
カルタ歯磨は最も微細の粉なれば歯を磨耗せず
カルタ歯磨は常用すれば口腔歯牙の諸病を防ぐ

文學士 久保天隨著

文壇獅子吼

定價四十五錢 郵税金六錢

博大精該の才識を以て不偏不黨、文壇の趨勢を論斷し毫も顧慮する處なきは、評論家としての著者の態度なりその問題は

○旅行談　佐藤虎吉君著　坪内及聖地　定價五十錢 郵税八錢
○平和の福音　青山學院教授山田寅之助先生著　定價四十錢 郵税六錢
○哲學の諸問題　時事士田中達君譯　定價三十錢 郵税四錢
○靈海新潮　海老名彈正君著　定價八十錢 郵税十錢
○キリスト物語　中村春雨君著　定價十二錢 郵税二錢
○日々の力　榎本正君譯　定價皮七十錢 同布五十錢 同紙三十五錢 郵税六錢
○貧兒出世美談　榎本正君譯　定價廿五錢 郵税六錢
○女子立身傳　榎本正君譯　定價四十錢 郵税八錢
○ダンテ研究　柏井園君著　定價四十五錢 郵税六錢
○青春の危機　渡邊勝吉君譯　定價卅五錢 郵税六錢
○野百合　碧川企救君著　定價廿五錢 郵税四錢
○聖書帖　桑學君著　定價十五錢 郵税二錢
○舶來泉筆　定價二圓より十圓迄種々

新荷洋山到着目錄出來御入用の方は二錢を添へ申入れ

東京銀座四丁目一番地
內外書肆 教文館
電話新橋二三五六

月刊

食道樂

第二卷第一號（既刊）要目

附錄 福笑判じ繪（懸賞）
口繪 御膳の本之新年の松（料理屋部譜）第十一回食道樂會々場

●一月の御膳立●家庭實用西洋料理●洋酒調合法●食事作法●家庭料理の原則●低廉なる滋養物●挽砂米の經濟觀●滋養物に富める海苔●支那の豆腐●教育料理●家庭料理いろは歌（春の部）其他數十件

定價 壹部十二錢 六部前金七十錢 十二部前金壹圓卅五錢（郵税共）

月刊 食道樂増刊 定價廿錢（郵税共）

いも菓子製法一百種

發行所 東京麹町區有樂町 有樂社

安部磯雄著

理想の人

第三版出づ

倫理宗教教育家庭社會の五編に分つ四六判形紙數四百八十有餘頁 金七十錢 郵税八錢

東京市京橋區五郎兵衛町 金尾文淵堂

小兒科 內科 外科 病 診療

新築落成移轉

府下淀橋町角筈（水道前）

淀橋醫院 竹下繁太郎

●歯科治療

自午前八時 至午後六時　神田區須田町廿六番地

歯科醫 吉瀬才一郎

勞働者諸君に限り藥價診察料共に御隨意
晝間執業者の便利上夜間十時迄治療仕候

文學、史學、宗教、道德の諸方面に亘り、虬龍の片甲、なほ能く雲を成す。一卷收むる處、凡そ七八十篇、長短錯落、生致あり情趣あり、眞個人間稀に見るの好文字。

發賣所 本郷千駄木林町 日高有倫堂

米國閨秀作家ハラデン孃處女作
日本 河合乙彥君譯

○タニノユリ（美本）定價卅錢 郵税不要

右は原名アット、ザグリーン、ドラゴンの翻譯にして秋は淋しき北米の片田舍に材を取りて筆の行く所思ひの向ふ所、山歌の聲、村笛の調ならざるはなく清新の興趣掬すべく好個の田園小說なり又附錄として北歐の文豪ビヨルソンの初業アルネの梗概をも添へたり

東京看護婦會長大關和子著

○派出看護婦心得（肖像入）定價十三錢 郵税二錢

訂正增補第三版成る

松本悟君著
○女流文豪ジヨルヂ、エリオット
附錄 アダム、ビードの梗概 サイラス、マアナーの梗概

東京市神田區猿樂町二五 振替貯金口座六三三〇番

發兌 中庸堂書店

すし
鮮魚御料理

牛鳥
西洋御料理
鳥御料理

下谷區上野山下
世界本店
電話下谷二十二番

同 三橋際
世界支店
電話下谷四十四番

◎定價 △一部四錢五厘、十部四十二錢、二十部八十錢 △申込は總て前金の事、△郵税當方持

編輯兼發行人 石川三四郎 東京府豊多摩郡淀橋町角筈七六二番地
印刷人 神崎順一 東京府豊多摩郡淀橋町角筈七六二番地
發行所 世界婦人社 東京府下豊多摩郡淀橋町角筈七三八番地
印刷所 株式會社國光社 東京市京橋區銀座二丁目廿一番地

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY